平成２８年度中国ブロック農業大学校等意見発表要旨

農業大学校名　公益財団法人中国四国酪農大学校　　学科名　酪農科　　学年　１　　氏名　岡田（おかだ）　美鈴（みすず）

１　課　　題

酪農を身近な産業に

２　意見・提言

（１）酪農との出会い

私は中学生の時に訪れた観光牧場での搾乳体験で初めて乳牛に触れた。最初は牛に対して少し怖い気持ちもあったが、触れてみるとても大人しく、「牛は人懐こく可愛い動物」という印象に変わった。そこから牛と酪農に興味を持つようになり、将来は牛の世話をする仕事に就きたいと思うようになった。そこで、牛について学ぶため農業高校に進学し、牛に対する接し方や飼養管理についての基礎知識を学んだ。高校卒業後はさらに知識を高め飼養管理技術の向上を図るため、中国四国酪農大学校に入学した。

（２）酪農と消費者との距離

私が生まれ育った兵庫県は、神戸ビーフが有名で和牛のイメージの方が強いが、生乳生産量が西日本３位と酪農も盛んである。しかし、他県同様、慢性的な労働力不足により酪農家戸数は年々減り続けており、酪農業は非常に厳しい状況に置かれている。酪農従事者が減少している原因の一つとして、酪農が消費者にとって身近な産業ではないと認識されていることが挙げられるのではないだろうか。

消費者は酪農についてどの程度知っているのか、私がもし牛に出会っていなかったら…と考えてみた。どのようにして牛が育ち、牛乳が作られるのか、おそらく何も知らないだろう。それどころか、「牛乳は体に悪く、病気になりやすい」「乳牛の餌にはホルモン剤や抗生物質が入っている」などという、世間で囁かれている根拠のない噂を信じていたかもしれない。

自分が知らない、よくわからないものは、身近なものとして認識できない。身近でないから興味が湧かず、自分との関わりが想像できない。この「酪農と消費者との距離」が酪農業界への新規参入者を阻んでいるのだと思う。

では、消費者に酪農という産業を正しく理解してもらい、距離を縮めるにはどうしたらいいのだろうか。私は、農作物ですでに取り組まれている「顔が見える農業」を酪農でも積極的に取り入れ、どのような環境で、どんな人が、どのように育てているのかを酪農家自らが消費者へ伝えることから始めたらいいのではないかと考えている。

（３）将来の夢

私は卒業後、酪農教育ファーム活動をしている牧場へ就農し、消費者への情報発信を積極的に行っていきたいと考えている。多くの方が酪農に触れ、理解を深めてもらえるように経験を積み、将来的には地元の兵庫県で牧場を開きたい。そして生乳生産だけでなく、6 次産業化や酪農教育ファーム活動といった情報発信を行い、人々にとって酪農が身近で当たり前の産業になるような取り組みを微力ながら進めていきたい。

酪農は人が生活していくうえで、なくてはならない産業だと私は考えている。誰かが辞めてしまえばその産業は衰退してしまう。それならば、その産業を「他の誰か」が復活させればいい。私はその「他の誰か」になりつつ、同じ思いを持って酪農を支えてくれる「他の誰か」を増やす人になりたい。